

フィールドワーク[希望学] 東京大学社会科学研究所

第5回 大人になるのが難しい時代

先日の帰宅途中、最寄りの駅前で、二人の女子高生の会話が耳に入った。一人は自転車でもう一人は電車で帰宅しようとしているらしかった。

「自転車で帰るのも遠くて大変だね。疲れない?」

「疲れるけど、それよりもっと電車に乗るのがイヤだからさ。だって、朝とか、ちよと通勤時間に重なるから満員でしょ。電車になんか乗るとオジサンくさいのが移りそうじゃん」

「言ってる。私は逆方向だから我慢できるけど」

そんな会話を聞いて、彼女たちは、ほんとうにオジサンが嫌いで我慢できないのだと、しみじみ思った。現実の満員電車には若い男性や女性も乗っているし、すてきな中高年男性だっているはずなのだが、女子高生の目からは、オジサンだらけの集団にしか見えないのだろう。彼女たちにとって、大人になることは、オジサンくささが染み付くことであるのかもしれない。

この十年ほど、フリーターやニートなど「働かない」「働きたくない」あるいは「働けない」若者が社会的な関心を集めてきた。教育や労働を専門とする多くの研究者が、このテーマで研究を蓄積している。若者の「働くこと」をめぐる状況の変化の最大の原因は、当然のことだが、経済的な不況が長引いて企業が採用を手控えたために就職が難しくなったことにある。だが、これらの研究の背景には、外的条件の変化だけでなく、若者たちの意識にも大きな変化が生じているのではないかという関心がある。

これまで、研究のため、さまざまな高校現場で進路指導の先生方にインタビューをおこなってきた。そこでも、高校生の意識が変化したというお話をうかがうことが少なくない。

研究でも数々の意識の変化が指摘されている。もちろん、若者が変わったのではなく、社会が変化しただけだという見解もある。けれども、私自身は、やはり若者の意識も変化してきたのだという立場をとりたい。若

者たちに特徴的なのは、「大人になることの忌避」と「社会に出ることへの不安」である。これらは、どんな人でも若い頃に経験した覚えがある意識だろう。けれども、現代の若者では、これらの意識の内実が変化しているように思われる。

大人になんかなりたくないという感覚には、二種類ある。一つは、どうやら大人は大人であることを楽しんでいて、その楽しさは他人の犠牲のうえに成立しているらしい、そんな汚い大人にはなりたくないという感覚である。もう一つは、大人になることには何の楽しみもなさそうだが、しかも若者の純粋さも失われてしまう、という感覚である。

社会に出るのが不安だということにも、たぶん、二種類ある。自分の居場所はどこかにはあるはずだが、それを見つけれらるだろうかという不安と、もともと自分の居場所などないのではないかと不安である。

若者たちを対象としたいくつかの調査や学生たちとの会話から、それぞれの意識が、後者に大きく偏っているのではないかと考えるようになった。つまり、彼らにとって大人になることは、多くを失うだけで得るものはほとんどないし、大人の社会には自分の居場所は用意されていない。そんなふう認識しているように思う。この認識はあまりにも悲しい。

だが、考えてみれば、大人であることを楽しんでいる大人は少ない。仕事は辛く報酬は少なく、健康も老後心配で、口を開けば愚痴ばかりという大人のほうが多いかもしれない。そんな大人しか見ていなかったら、若者たちが大人になることに魅力を感じなくても不思議ではない。

このように考えるようになってから、高校の先生方に質問することがある。「先生は、大人として生きることを楽しんでいますか。大人になってよかったですか」と。

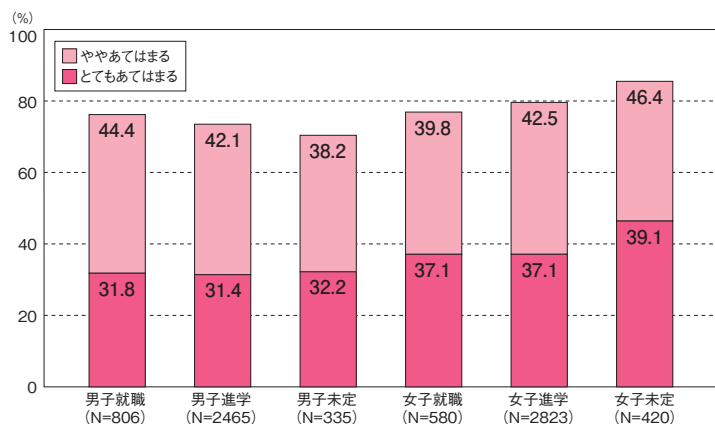
高校生が出会うことができる大人は限られている。

両親や親戚、高校の先生、アルバイト先の上司や先輩などである。これらの大人がカッコよければ、高校生も、大人になる勇気をもつことができると思う。

最近、高校現場の労働環境が厳しさを増し、先生方の疲労が高まっていると聞く。だが、大人になることが難しい時代だからこそ、高校の先生には、是非、カッコいい大人でいてほしい。先生が働くことを楽しめる学校で、仕事だけでなく充実した生活を送っていることが伝われば、それが、きつと、大人に向かって一歩ずつ進んでいく、高校生の背中を押すことになる。そのためにも、力を合わせて学校や職場環境を変えていっていただきたい。それはまた、高校生が社会は変えられたいと確信する力につながると思う。

(東京大学社会科学研究所准教授 佐藤香)

■ 社会で上手くやっっていけるか不安だ (2004年3月高校卒業生 性別・進路別)



出典: 東京大学社会科学研究所「高校生の生活と進路に関する調査」研究会